

福祉のはざまで

——「吃音」の理解・啓発の難しさと“多様性”をめぐる

日本社会事業大学大学院福祉マネジメント研究科（専門職大学院）1期2005年修了

須田 研一

I. はじめに

「吃音当事者にとっては、“多様性”から取り残されているじゃないかなって感じざるをえません。」¹⁾

発言の主は「注文に時間がかかるカフェ」を主催する奥村安莉沙だ。「注文に時間がかかるカフェ」とは「接客業に挑戦したい吃音の若者の夢をかなえる1日限定のカフェ」である。奥村はこの活動を全国に広げている²⁾。

私自身も吃音当事者である。当事者の多くは吃音を広く知ってほしいと思っている。吃音のある人のセルフヘルプグループ（自助グループ）³⁾では、吃音に関する理解・啓発活動に取り組んでいる。

小説の世界では、吃音者が主人公として登場している作品が何冊もある。実際の事件をモチーフにした三島由紀夫の『金閣寺』（新潮文庫）や遠藤周作の『彼の生きかた』（新潮文庫）ほか、重松清の『きよしこ』（新潮文庫）及び『青い鳥』（新潮文庫）、芥川賞を受賞した諏訪哲史の『アサッテの人』（講談社）などがある。なお、重松と諏訪は自身も吃音のあることを公言している。

また、吃音に深く悩んだジョージ6世を取り上げた『英国王のスピーチ』（2011年2月公開）は米アカデミー賞を受賞した。日本では同映画が舞台化され、「少年隊」の東山紀之が主役を務めて話題となった。

さらに、メディアでは、「ABEMA Prime」がたびたび「吃音」を取り上げているほか、NHK（E

テレ）では、「ハートネットTV」および「バリバラ」等の番組で、過去数回「特集」が組まれた。昨今は、「注文に時間がかかるカフェ」の活動がテレビ・新聞等で取り上げられている。このように散発的ではあるが、まったく話題にのぼらないわけではない。それでも吃音は社会的に認知度が低い。

その理由のひとつに学校教育で「吃音」を学ぶことは当事者でもない限りまずないであろうし、教員も大学等の養成機関で「吃音」を学ぶ機会もない。それは福祉系の学校も同様であろう。

そこで本稿では、吃音の理解・啓発の難しさと社会から取り残されないために、当事者に立脚しながら「社会に求める理解」について考えていこうと思う。

II. 「可視化される吃音」と「可視化されない吃音」

まず吃音とは、「話者は、自分が何を言いたいかわっているが、不随意的に生じる繰り返し、引き伸ばし、発生の停止のために言うことができないようなスピーチのリズムの障害」を言っている⁴⁾。吃音の定義には、「繰り返し」「引き伸ばし」「発生の停止」の3つの意味が含まれていることがわかる。

一つ目は、「繰り返し」である。繰り返しとは、「しゃしゃしゃしゃじだい」といった語頭の音（オン）の重なりである。これは「連発性」の吃音と呼ばれている。

二つ目は、「引き伸ばし」である。これは、「しゃーじだい」といった、言葉の意味そのままであり、「伸発性」の吃音と呼ばれている。

そして、三つ目は、「発生の停止のために言うことができない」といった、言葉の「つまり」を意味する。これは最初の「しゃ」の音がスムーズに出てこない状態で「——（数秒沈黙が続いたのち）しゃじだい」といった場合であり、「難発性」の吃音と呼ばれている。

私は吃音の理解・啓発が進まない理由のひとつに、人々（非吃音者）が抱く吃音の意味理解にあると思っている。

2023年2月に「言語聴覚士」を養成する専門学校に吃音当事者として呼ばれた。講演の際に、学生に対して「これまでの人生で吃音のある人と関わったことがない人は挙手してください」と言うと、全体の1割強の学生が手を挙げた。人数にして7, 8人である。ホームページで学生の構成比を調べてみると、平均年齢は32.3歳。年代別では20代と30代以上とがそれぞれ約半数と書かれていた。

吃音者は約100人に1人いると言われている。日本の人口からすれば約120万人の吃音者がいることになる。挙手をした学生の「これまでの人生」で関わった人数からすれば、100人未満であろうはずがなかろう。吃音者全体の人数からすれば、必ず関わっているはずだ。ここにカラクリがあると思うのである。

それは、「吃音児者の非流暢性で一番多いのは、幼児、学童では音節の繰り返しで、特に幼児期男児に多い。成人も音節の繰り返しは存在するが、成人は阻止（ブロック）が1位となっている」⁵⁾とあるように、「繰り返し」の吃音者よりも「つまり」の吃音者の方が多くいるということである。文中にある阻止（ブロック）とは、難発性（つまり）の吃音を指している。

つまり、「繰り返し」（連発性）の吃音は、しゃべれば表面化することから、明らかに吃音があると第三者からみても認知される。一方、「つまり」（難発性）の吃音の場合は、例えば、「日本」を例にとると、その人にとっては「にほん」は言い難い言葉であっても、「にっぽん」ならスムーズに言えるといったような場合、他者からすればその

人に吃音があるのかどうかはわからないのである。

私の場合だが、スムーズに出てこない苦手な言葉のひとつに「お先に失礼します」がある。「お先に」が私にとっての言い難い言葉なのだ。そこで「お先に」がつまって出てこないときには、ただ単に「失礼します」とだけいうのである。そんな誤魔化しのテクニックを使っているのである。

このように難発性の吃音者の場合は、自分自身にとっての言い難い言葉をとっさに言い易い言葉に置き換えてしゃべれることから、しゃべれば表面化する「繰り返し」の吃音とは違って、第三者からすれば吃音を可視化されない。つまり、吃音を隠せるのである。

ニュージーランド・カウンセラー協会員の国重浩一は、「どもりの当事者のグループに行くと、どうしてその人が当事者なのかよくわからない人たちがたくさんいる。つまり、ほとんどの場合どもらないで話せる人たちもたくさんいるのだ。それでも『どもること』は、存在感を持ってその人の人生に影響を与えてきたのだ」と言っている^{6) 7)}。

また、2014年12月から2016年6月の期間に全49回放送された、当時大学生だった女性吃音者がインターネットラジオ番組『吃音ラジオ』を始めた。番組では、毎回、当事者の方をゲストに招いて体験談などを聴くのであるが、「この人は本当に吃音者なのか」と思うぐらい流暢にしゃべっている当事者が少なくないのである。カミングアウトしない限り、当事者同士であってもわからないであろう。そんなゲストの方が多く出演している⁸⁾。

私自身もそうだ。大学を卒業後、一般企業に約15年間籍を置いたが吃音を指摘されたことはないし、一般企業を退職後、大学や専門学校等で講師の仕事もしているが、学生から吃音を指摘されたことは一度もない。すなわち、吃音者であることがわからない当事者が多くいるということである。

このように吃音が表面化しない「可視化されな

い吃音者」が吃音のマジョリティであることから社会は吃音者の存在を身近に感じないのではなかろうか。

Ⅲ. 吃音は恥ずかしい障害？

私はこれまで吃音をテーマにした文章を何本か書いてきた。文章を読まれた知人のひとりからこう言われたことがある。

「なんで、(吃音であることを)言わないの？」と。

それは私が文中で引用した文章を読んでのことだった。引用文を掲載する。

電話でも苦勞しました。会社名は言いにくい「コ」で始まりますが、最初に「はい」をつけると応答できました。でも店長から、「電話は社名から言わないといけない。『はい』はやめろ」と言われました。出ない言葉を、絞り出すようにしていると電話口で無言が続き、間違い電話と思われるで切られてしまう。そういうことが重なり、人と接することは好きだったのですが、精神的にもしんどくなって、会社を辞めることにしました。」⁹⁾

まず、この方は「つまり」のある難発性が中心の吃音者であることがわかる。表面に出ないことから店長はその方に吃音があることをわかっている。それでは店長に吃音をカミングアウトし、理解を求めたのであろうか。多分言っていないのでないかと推測する。公言（説明）したのであれば、「わかってもらえなかったから、辞めた」となるのではないだろうか。

この方のように吃音のあることを周囲に言っていない／カミングアウトしていない吃音者は少なくないと思われる。

私自身も一般企業時代、吃音のあることを言わなかった。言う必要もなかったからであるが、隠していたことも事実である。

これまでも書いてきたのだが、小学生の頃は「繰り返し」であったり「つまって」言葉が出なかったり、無理に言おうとすると、「……………ほほほほくは」となったりした。そうすると必ず笑う者がいた。それが子どもの頃からずっと蓄積されてきたのだから、極力ともらないように、とっさに自分自身にとっての言い易い言葉に置き換えてしゃべる癖がついてしまっているのだ。つまり、私の場合は、吃音を隠すと言うよりも、吃音を避ける癖がついてしまっているのである。

なので私の場合は、吃音をごまかすことができることからカミングアウトもしない限り吃音のあることを知られることはまずない。

では、なぜ、隠していたのかというと、単に説明するのがめんどくさかったからだ。めんどくさいというのは、果たしてカミングアウトしたときにわかってもらえるだろうか、という懸念もあった。なぜなら、私は同僚とのやり取りも“ふつう”にこなしているし、電話応対もマニュアルでもって縛りがなければ、“ふつう”にに対応できる。そんな私が、「いや～、実は自分、吃音でさー、どもるんだよね」と言ったところで、同僚はどう思うであろうか。

「ABEMA Prime」に出演した「あかし」も、「説明しているときは流暢にしゃべれたりするので、『今しゃべれてんじゃん』と指摘されて、説明しても伝わらないことが気持ち的にモチベーション的にどんどん下がっていったります」¹⁰⁾と話していた。

さらに、成人の約100人に1人もいるのに問題として浮上していないのは、それなりに理由があると「ABEMA Prime」のコメンテーター、佐々木俊尚は言う。佐々木は潰瘍性大腸炎を患っている。安倍晋三元首相も苦しんだ潰瘍性大腸炎は原因不明の難病とされている。佐々木は、吃音の認知度が低い理由を自身の潰瘍性大腸炎とを結びつけて以下のように語っている。

「潰瘍性大腸炎って腸から出血して、おしりから血が出て、すごい馬鹿にされるんです。知らな

い人にはね。酒飲みすぎてんじゃないのかとか？おしりから血が出るだけで笑いものになる。潰瘍性大腸炎も吃音も恥ずかしい障害なんです。恥ずかしい障害はなかなか人にも言えないし、仮に、障害であったり、病気であったり、例えそれが社会に認知されていても言った瞬間になんか馬鹿にされるんじゃないかという気持ちが常にあるのでやっぱり表に出しにくいんですね。だから100万人ぐらいいるのにほとんど社会に出てきていない。みんな隠しているんですね¹¹⁾と。

もちろん当事者の誰しもが佐々木のように「吃音は恥ずかしい」と思っているわけではないだろうが、私は佐々木の意見に同意する。

吃音は、家族間で遺伝する傾向がある¹²⁾。私の父親は連発性の吃音が中心の人であった。しかも発話するたびにひどくどもっていた。私を呼ぶときは決まって「けけけけけいち」となる。それがすごく嫌だった。だから、父が休みの日にうちにいるときは絶対に友だちを呼ばなかった。子ども心に「恥ずかしい」「格好が悪い」と思っていたからだ。

多くの吃音のある人は、子どもの頃に、自身の吃音をマネされたり、からかわれたり、笑われたり、注意されたりした経験を持っている。

私の場合は主に難発性の吃音であるが、ときおり連発性になったときに、他者が笑みでも浮かべたら、今でも恥ずかしさを感じてしまうのである。

登録者数が61万人を超えるユーチューバーの「シーサーSeasar」は、「YouTubeでしゃべったり、プレゼンをしたり、歌を歌っているときはぜんぜん滑らかに出るんですけども、『予約した自分の名前を言う時』だったり、店員さんに『お水もらっていいですか』と聞くのも苦手なんです。あと、初対面とか、久しぶりに会ったりして、緊張する人に対して出にくい。あと、車とか飛行機の中とか、すごいガヤガヤして騒がしい所とかは、リラックスできなくて、それでもちょっとどもったりすることがあるんですね。なので場面によってしゃべれないときもあるって感じで

す」と話している。

続けて、「(吃音が)人前で発症しちゃうと、めっちゃくちゃ恥ずかしいんですよ。だって、予約していくお店で自分の名前を発せられないのってめっちゃ恥ずかしいじゃないですか」と視聴者に語りかけている¹³⁾。

言い難い言葉やどもる(苦手な)場面は人によって違いはあるが、言い換えのきかない名前などの固有名詞や「ありがとうございます」「いらっしやいませ」「おはようございます」「お世話になっております」「お疲れ様でした」「お電話ありがとうございます」などの挨拶語や接客用語、電話応対などのマニュアル言葉を言うのを苦手とする吃音者が実に多くいるのである。

IV. 認知度の低さが誤解を生む

吃音の認知度の低さの一番の理由は、「可視化されない吃音」の存在にあると書いた。しかも「可視化されない吃音者」の中には、同僚や友人などの会話で吃音を知られることなく過ごしていることから、その人がカミングアウトでもしない限り気づかれないのである。だから、そこに誤解を生むのだ。

かつて気心の知れた友人に吃音のあることをカミングアウトしたことがある。しかし、友人は怪訝そうな顔をして、「えー、須田さんって、緊張しいだったんだ」と言った。説明をしようとしたが、「いいよ、いいよ」と言って拒まれた経験がある。

確かに、吃音者は緊張しやすいと言える。それでは、それが「吃音」ではなく、単に「あがり症」からくるものなのであろうか。

前出のユーチューバー「シーサー」は、「吃音じゃない人からすれば、なんでしゃべれないのと思うじゃないですか。どうせ、緊張するからしゃべれないんでしょ？緊張しないようにリラックスして言えばいいじゃん。違うんですよ、これ。緊張しちゃうからどもるんじゃなくて、どもってしまうから緊張しちゃうんですね。なのでチェックインするときに、今回はしっかり言えるかな言え

ないかなみtainな感じで、すごい緊張しちゃうんですね」¹⁴⁾と話している。

整理すると、非吃音者は「緊張するからどもる」のに対して、吃音者は「どもるから緊張する」。この感覚の違いは当事者でないとなかなか理解できないのかもしれない。

吃音者は、ある特定の場面でもって失敗した経験が脳(潜在意識)にすり込まれて(蓄積されて)いく。例えば、自己紹介や朗読の場面でもって笑われてしまったような場合である。そうした不安の心理が働いて、苦手な場面が作られていく。そして、その場面に直面したとたんに、「今度もうまくしゃべれないのではないかな」「どもってしまうのではないかな」「笑われるのではないかな」という不安に陥ったりする。つまり、「予期不安」に襲われるのだ。「しーさー」が言う「チェックインするときに、今回はしっかり言えるかな言えないかなみtainな感じで、すごい緊張しちゃうんです」というのがまさにそうである。「どもるから緊張する」というのは、吃音者特有の「予期不安」を言っているのだ。すなわち、緊張しているからといって吃音が出るとは限らないのである。

吃音ドクターと知られる菊池良和は、「吃音の相談に来院する 88 パーセントの親は、どもっているときに、『ゆっくり話さない』『落ち着いて』『深呼吸して』とアドバイスしている」が、それはしてはいけない「禁止事項」だと言っている¹⁵⁾。非吃音者になら、「ゆっくり話さない」「落ち着いて」は有効かもしれないが、吃音児・者にはまったく効果のないアドバイスなのである。

ミノリハは、YouTube 動画の中で自身の体験談として「吃音に対する 10 の誤解」について語っている。そのうち「治療すれば治る」のところでは、「ノーと言いたい」と言う。なぜなら、「吃音は治る!という考え方が世間に広まると一番困るのは当事者だ」。「例えば、治るんだったら病院行きなつて言われたり、ネットで上司が吃音を調べたら治るつていう情報を見て、その吃音を治さないとクビだつて言われた人も実際にいるらしい」。また、「治る」の概念について「『スムーズ

に話せるようになること』を治るとすると、『非吃音者の状態になる』か『コントロールされた話し方で吃音が出ないようにする』の 2 つがある」と言い、「『コントロールされた話し方で吃音が出ないようにする』というのは、吃音の本や言語聴覚士等の訓練とかでいくつか方法があるけど、それがうまくはまる人もいれば合わない人もいる。うまくはまってスムーズに話せるようになったとしても、実は本人の心理的負荷は高いままで結局悩み続ける人もいる」と語っている¹⁶⁾。

一般的に、吃音の原因はわかっていない。だから、「これだ」といった治療・訓練法も確立されていないのが現実だ。YouTube 動画やインターネット上で「吃音は治る」とうたっているサイトも多くみられるが、それは吃音者にとって有害となりえることから、当事者として憂慮しているのである。

V. おわりに

現実的に、吃音の理解・啓発が進まない中で、吃音のある人が「多様性」から取り残されないためには社会に何を求めるべきであろうか。

吃音を広く社会に知ってもらう努力をすることは、もちろんであるが、もうひとつは吃音者の生きづらさに焦点を当てて、少しでも吃音者にとっての“やさしい社会”へと変えていく努力もしていくべきであろう。

私が思う「社会に求める理解」とは、これまで一貫して主張しているが吃音者が接客や電話応対等をする上で障壁となっているマニュアルによる言葉の強要をしない社会をつくることである。

吃音者の中には、自分が発音しづらい言葉を書わなくても済むように様々な努力をしている。私も人前で話す仕事をしているが、言い換えを駆使して吃音が表に出ないようにしている。しかし、一字一句変えることを許されない言葉の使用を強いられるなら、話は一変する。例えば、「ありがとうございます」が言えずに日々格闘している吃音者もいる。「どうもありがとうございます」な

ら言えるのに、それが許されない状況は何とも息苦しい。ファストフード店に代表される接客や電話対応のマニュアル化と、それを強いる風潮に生きづらさを感じている吃音者は少なくないと思っている。

一方で、確かにマニュアル言葉は（それを難なく言える人には）便利で効率的な面もあるであろう。しかし、話し方は頭ごなしに押し付けられるものではなく、接客、電話応対マニュアルにも個々の創意工夫が加えられる余地が欲しい。吃音者に限らず、それだけで電話の苦痛から解放される人もいるはずだ。

円滑に仕事を進めるために作られたはずのマニュアルに苦しめられるケースがあることも知ってもらえると、吃音のある若者も安心して働ける環境が整うのではないかと期待する。

吃音のある人たちが“多様性”から取り残されない（エクスクルージョンされない）ためには、マニュアル言葉に縛られない話し方の多様性が認められる社会こそが、常識であってほしいと思うのである。

数年前に在籍していた学校で保育士実習や施設

実習に携わった際に、実習巡回日のアポイントをとるために、施設に電話をすると「お電話ありがとうございます」と出る職員が年々増えてきたように思っていた。

また、放課後デイサービスに勤めている知人と話しをしていたときに、「うちの法人は『お電話ありがとうございます』と言わなければいけないんですよ」と言っていた。

今回、私がこの原稿を書こうとしたきっかけが、この知人の言葉だった。

福祉業界でもファストフードに代表される言葉のマニュアル化が浸透してきていることに危惧を抱いたからだ。

当事者の立場から、読者の皆さんに「吃音のことを知ってほしい」「吃音のある人が生きやすい社会」について一緒に考えてほしいと思い、本稿を執筆した。皆さんが吃音のある人の“多様性”について考えるきっかけにいただければ幸いである。

最後に本稿を提出するにあたってジャンルを「資料・報告」として提出したが、当事者としての私自身の意思を伝えなかったため、「エッセイ」風で書かせていただいた。

【注】

- 1) 10) 11) 13) 【吃音】「『ふざけてるの？と言われる』スムーズに言葉が出ない苦しさとは？学校で茶化され真似される小学生の苦悩 吃音症を正しく知る」『ABEMA Prime』2021年8月31日 (<https://youtu.be/80YKU7O8HPU>) (参照日 2023年5月21日))
- 2) 注文に時間がかかるカフェ (https://peraichi.com/landing_pages/view/kitsuoncafe/) (参照日 2023年5月21日))
- 3) 吃音のある人のセルフヘルプグループでは、全国に組織を有する「言友会」(げんゆうかい) が有名である。そのほか言友会の創設者である伊藤伸二が立ち上げた「日本吃音臨床研究会」や若者を中心とした「うーすた」などがある。
- 4) 日本聴能言語士協会講習会実行委員会編集(2001)「アドバンスシリーズ『コミュニケーション障害の臨床2 吃音』」20, 協同医書出版社
- 5) 前掲書 7-8
- 6) 日本吃音臨床研究会会報「スタタリング・ナウ」2016.6.20, No.262
- 7) 国重は、「どもり」という表現をつかっている。「どもり」と「吃音」は同義語である。ひと昔前は、「どもり」という言葉が使われていたが、マスコミの配慮によって差別語扱いされてきた歴史がある。しかし、吃音のある人のセルフヘルプグループでは、むしろ「どもり」の方を積極的に使用してきた経緯がある。現在はセルフヘルプグループなどの働きかけもあって、「吃音(どもり)」と表記するケースも見られるようになってきた。
- 8) 現在でも YouTube 動画で視聴できる (<http://kitsunradio.web.fc2.com/>) (参照日 2023年5月21日))
- 9) 日本吃音臨床研究会会報「スタタリング・ナウ」2018.10.21, No. 290
- 10) 菊池良和 (2019)『吃音の世界』光文社新書, p75-p79
- 11) 14) 「滑らかに言葉が出ない発話障害 ... 実はシーサー、吃音症です。」「シーサー文具」(<https://youtu.be/G1-tO9pLbeI>) (参照日 2023年5月21日))
- 12) 菊池良和 (2012)『エビデンスに基づいた吃音支援入門』学苑社, p108-p111

- 16) YouTube 動画「スタタッターちゃんねる」のミノリハは吃音に対する誤解として、「①緊張してたよね、②吃音＝コミュ障、③触れてほしくないよね？、④全然どもってないやん、⑤症状が軽い＝悩みが小さい、⑥吃音でて苦しそう、⑦うまく話せない＝頭が悪い・能力低い、⑧カラオケは無理か…、⑨治療すれば治る、⑩100人に1人が悩んでいる」の10の事例を挙げている。本人も言っているが吃音者すべてがそう思っているわけではない。(https://youtu.be/wEN0v6nftuk (参照日 2023 年 5 月 21 日))

<参考文献>

- 伊藤伸二 (2004) 『知っていますか？ どもりと向きあう 一問一答』 解放出版社
水町俊郎・伊藤伸二 (2005) 『治すことにこだわらない、吃音とのつき合い方』 ナカニシヤ出版
伊藤伸二 (2008) 『どもる君へ いま伝えたいこと』 解放出版社
菊池良和 (2019) 『吃音の世界』 光文社新書
菊池良和 (2012) 『エビデンスに基づいた吃音支援入門』 学苑社
菊池良和監修 (2015) 『吃音のことがよくわかる本』 講談社
須田研一 (2010) 「吃音（どもり）知っていますか？ —吃音（どもり）の意味をめぐって—」『障害学研究 6』 116-125, 明石書店
須田研一 (2013) 「お電話ありがとうございます。— 定型的なマニュアル言葉の抑圧から解放へ—」『障害学研究 9』 164-172, 明石書店
須田研一 (2020) 「続「お電話ありがとうございます」と言わなければいけませんか？—多様性を尊重するために、「私」がしてほしいこと—」『障害学研究 16』 42-50, 明石書店
須田研一 (2021) 「画一化された価値観から多様性を認める価値観へ —言葉のマニュアル化社会と吃音のある人をめぐって—」『日本社会事業研究 60』 48-53